

第1回～第23回のインタビューメッセージのまとめ

平成30年5月31日

1. シビルエンジニアが退職後も輝くために

現在も活躍しているシニアの方々のお話の中で、現役世代のシビルエンジニアへのアドバイスや参考となる意見を多数拝聴することができた。頂いたアドバイスや参考となる意見については、以下の分類にまとめた。また、今回意見を拝聴した方々は、1940年代～1950年代（現在 60代～70代）に出生した方となる。

(1) 定年退職前に身に付けておくべきスキル・経験等

- 技術士やコンクリート診断士ぐらいは最低必要な資格である。(第1回 松淵氏)
- 現役時代は、多面的に興味を持ち仕事以外のことに取り組める余裕が必要である。かつ、プレゼンテーション能力も磨くことが大事。(第2回加藤氏)
- 肩書がなくなった時に役に立つ論文などの客観的な記録を残すこと。(第3回 藤田氏)
- 色々な本を読んだり、休暇を取ってでも学会活動や人脈作りをすることが必要である。(第4回 高木氏)
- 人脈作り、仕事以外での知り合いも含め人と人の繋がりが重要である。色々な場所へ行くなど知見を広める。(第6回 正木氏)
- 講座や講習などで地域とのつながりを作っておくことが重要である。(第7回 岩本氏)
- 技術者として揃えておくべきものとして「資格」があるが、人と人の関係を築いて置くことが重要である。色々な事を「学ぶ」という前向きな気持ちを持ち続けることが重要である。(第8回 青山氏)
- 自分の頭でものを考える癖をつけるのが大事である。(第10回 尾田氏)
- 資格も有することも必要であるが、仕事から逃げない姿勢も大切と考えている。また、定年の数年前から定年後の準備をすることが必要である。(第11回 中西氏)
- 退職後の人生を考え、設計図を作ることを勧める。(第12回 井出氏)
- 幅広く可能性をとらえて、勉強しておくことが重要である。(第16回 鐘築氏)
- 語学力や論文の書き方といったスキルは、若いうちに身につけた方がよいと考えている。(第17回 大元氏)
- 英会話力とディベート術は、欠かせないと考えている。今まで築いた人脈を大事にして欲しい。(第18回 松井氏)
- 多くの現場を見て、経験を積むことが大切である。(第19回 山中氏)
- 土木の基礎をしっかりと勉強することが大切である。(第21回 黒山氏)

定年退職前に身に付けておく必要があるスキル・経験等については、技術士等の資格を取得するほか、人脈作り、様々な分野（語学力・プレゼン能力等）に興味を持ち勉強することが重要であるとの意見が多い。また、定年の数年前には、自分が定年退職後のライフプランを考えておく必要があると言える。

(2) 土木技術者の退職の考え方

- 「1/3 分割方」が理想である。生活を 1/3 に分割し、1/3 は、自身の経験やノウハウをボランティアとして社会に還元すること、1/3 は、全く自由な時間を持つこと。(第 2 回 加藤氏)
- 「定年退職後」と考えるよりも現役時代をより長く考えることが大事だと思う。(第 9 回 齋藤氏)
- 技術者の定年年齢は、本人が決める。(第 12 回 井出氏)
- 仕事も人生もサイクルを意識するのが良い (第 13 回 有岡氏)
- 土木技術者には、「退職」というものはない。(第 14 回 安江氏)
- 「生涯現役」「生涯勉強」である。(第 15 回 渡邊氏)
- 生涯現役が基本である。(第 16 回 鐘築氏)
- 定年はないと思って仕事を続けている。(第 17 回 大元氏)
- 仕事が苦になったとき、あるいは自分の仕事に対し達成感が薄れ始めたときに退職する時期である。(第 23 回 加藤氏)

定年退職の考え方については、生涯現役、定年はないと考えている活発なシニアエンジニアが多い。

(3) 土木技術者に関する考え方

- 土木屋は、一つの分野のスペシャリストというのも大事だけれど、本来はジェネラリストであるべきである。物事の根本に遡ってものを見るという癖をつけていないとダメ。(第 10 回 尾田氏)
- 資格は、これから視野を広げるための「パスポート」だと考えている。(第 11 回 中西氏)
- 土木技術者の仕事は、公共工事の顧客は行政でなく、本来の顧客である市民の目線に立って謙虚な気持ちになってものを見て、共に学び感じようとするのが重要である。(第 14 回 安江氏)
- 日本と海外との共通点や違いを習得しておくのが重要である。また、エンジニア的思考「現象から原因をたぐり寄せること」、ものごとの背景にまで踏み込んで知ろうとする「好奇心」が重要である。(第 15 回 渡邊氏)
- 色々なことに挑戦し、物怖じせず、とりあえずやってみる姿勢が技術を覚える上で重要である。また、いかに人に頼るかということも大切である。(第 17 回 大元氏)
- 土木分野の限られた範囲だけでなく、色々なことを吸収する必要がある。(第 19 回 山中氏)
- その時にできる最善を尽くす。(第 20 回 昌子氏)
- 人との繋がりが重要である。また、「遊び」も時には必要である (第 22 回 末岡氏)
- 「Know why」なぜそうなのかという、理由や仕組みを理解することが技術者には、必要である。(第 23 回 加藤氏)

(1) の「定年退職前に身につけておくスキル・経験等」に示している内容と同様に、土木技術者は、幅広い視野、人脈が重要であるとの意見が多かった。また、本来の顧客である市民目線で物事考えていく視点もこれからの土木技術者に必要である。

(4) 次世代の技術者の育成及び技術の継承

- 経験ややり方などは、会議など伝えることができない。現場で日々の動きを見ながらコミュ

ニケーションを取ることが大事。(第1回 松渕氏)

- 基本的に人を育てることができないと思っている。向上心や持続力は、個人の意思と考えている。(第5回 佐伯氏)
- 仕事は教えてもらうのではなく、自ら見ながら覚え、伝承されていくもの、という考えを持っている。(第9回 齋藤氏)
- 培ってきたアナログでの仕事の仕方の伝承を心掛けている。(第11回 中西氏)
- 社外に出して育てるよう努めた。人を伸ばすためには、人脈や情報源を持つ機会を与えることが大切である。(第12回 井出氏)
- 問題解決の答えが無数にある今の時代、一つの方向に絞り込む「勘」が必要である。(第13回 有岡氏)
- 自身の経験を次の世代に受け継ぐことが使命である。(第14回 安江氏)

次世代の技術者の育成には、会議等で伝えるのではなく、日々の仕事を通じたコミュニケーションが大事であるとの意見がある。また、技術継承を受ける方も、向上心や持続力を持ち、シニアエンジニアと接して行く必要がある。

(5)社会及び土木界への意見等

- これからは、作る側の技術だったがこれからは使用する側の技術となる。よって、For Civil から Of Civil、By Civil への転換が必要である。(第3回 藤田氏)
- 能力がある人は、定年退職にとらわれずに仕事を続けられる仕組みが必要である。(第4回 高木氏)
- 会社経営は、儲けより、いい仕事をするのが大事である。(第5回 佐伯氏)
- 過去の公共事業の情報は当時の担当者しか知らない情報もあるため、公共事業の過去の経緯の問い合わせ窓口を創ることを考えている。(第6回 正木氏)
- 一般の人に土木界を理解してもらうため、建設現場の公開が重要である。(第7回 岩本氏)
- 先輩技術者を社会で活用できる仕組みが必要である。なお、親の介護問題等にシニア技術者が直面するため、隔日勤務等の勤務形態へ対応できることも必要である。(第8回 青山氏)
- 「市民目線」で物事を考えるのが重要である。(第14回 安江氏)
- 使う人の立場で考えることが重要である。(第16回 鐘築氏)
- 日本の土木界は、国内の市場が縮小し東南アジア等への海外展開を図らないとならない時期だと思うが、内向き志向で準備を怠っている。(第18回 松井氏)
- これからは、物を作る時代ではなく、作ったものをいかに後世へ伝えていくか、より良いものにしていくかが大切である。また、仕事を「やりがいのあるもの」「魅力のあるもの」にしていかないと若い人がついてこない。(第19回 山中氏)

今後の土木界は、作る技術から、使用する技術・作ったものをいかに後世へ伝えていくかが重要となる。また、土木界を一般の人に知ってもらうためのPR活動も実施、土木界の魅力を発信し、土木を目指す技術者を確保する必要がある。

なお、シニアエンジニアについては、働く場の提供、働き方を選べる社会としての仕組みの構築が必要である。前述したことを実践することができたならば、土木界をより活性化することが可能であると考える。

(文責：原田 泰行)